

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第592号 平成25年8月12日

## 終戦のエンペラー2

昭和天皇自身「開戦の際東条内閣の決定を私が裁可したのは立憲政治下における立憲君主として已むを得ぬ事である。若し己が好む所は裁可し、好まざる所は裁可しないとすれば、之は専制君主と何ら異なる所はない」と述べています（寺崎秀成著「昭和天皇独白録」から）。

敗戦という悲惨な状況にありながら、多くの国民は天皇を敬愛していたものと思われます。それは、天皇が全国を巡幸された際の、それぞれの地域での国民の熱狂的な歓迎ぶりがそれを良く物語っています。

終戦直後の日本には、なお陸海軍約700万人近い兵士が残存しており、しかもその内約250万の兵士は国内にいました。これら多くの兵士達が、天皇の命令によって戦闘を停止し、粛々と武装解除に応じる姿は、欧米人には驚異であり、理解できない事だったと思われます。それだけに、マッカーサー元帥は、天皇を戦犯として処刑した場合には彼を殉教者に仕立て上げ、日本国内に大きな混乱が引き起こされ、対日占領が失敗するかも知れないという恐れを持っていてと思われます。ですから、マッカーサー元帥は、日本の降伏の象徴として天皇の来訪を望んでいました。

昭和20年9月27日、天皇によるマッカーサー元帥の訪問が実現します。会見の全容は未だに明らかにされていませんが、マッカーサー元帥は彼の回想記の中で、天皇は「私は国民が戦争遂行にあたって、政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の採決にゆだねるためにおたずねした」と述べたとし、「死をともなうほどの責任、それも私の知り尽くしている諸事情に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする、この勇氣に満ちた態度は、私の骨のズイまでゆり動かした」と深い感動を吐露しています（袖木林二郎著「マッカーサーの2000日」より）。

モーニング姿の天皇の隣にノーネクタイのカーキシャツ姿、腰に手を当てて傲然と立っているマッカーサー元帥の姿。この二人の写真は、日本国民に日本の敗戦という現実を見せ付けるのに十分でした。この写真を見た作家の高見順は「かかる写真はまことに古今未曾有のことであると」と自身の日誌に記述しています（児島襄著「日本占領」から）。私は今でもこの写真に対しては心穏やかではありませんが、恐らく、当時の一般国民の感慨もまた、同じようなものだったに違いありません。

日本人に降伏感を与えるというマッカーサーの思惑は功を奏したといえます。しかし同時に、マッカーサー元帥は天皇に対して好印象を持った事も事実で、天皇が退出する際玄関まで見送りに出た事でもそれは分かります。

また、天皇の戦争責任を問わないというマッカーサー元帥の方針がその後の日本の進む方向に極めて大きな影響を与えた事は、いう迄もありません。

なお、映画の中では近衛文麿元総理がフェローズ准将に対して、日本が朝鮮半島や中国大陸等に進出したのは、イギリスやフランス、アメリカという欧米列強の真似をただけだ。にもかかわらず、アメリカは戦勝国として日本を裁けるのかと問う場面があります。

何やら、先日の橋下市長が従軍慰安婦問題で「日本だけではない」と発言した事と通じる所がありますが、そこには、かつて日本が自国の利益の為に、朝鮮半島や中国大陸等に住む多くの人々に、甚大な被害と消せぬ痛みを与えたという肝心な事を忘れてる様に思えてなりません。この被害者の痛みに対する共感力なくしては、如何なる言説も説得力を持たないのではないのでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）